

遠回りのご報告



高田 秋生 (旧姓：相川)

(理学療法士／コミュニティ福祉学科 2008年卒業)

はじめまして、高田秋生と申します。当初、このまなびあいへ私が最初に提出したのは別の原稿でした。しかし、事務局へ提出した直後、それを読んだ夫に「非常に分かりづらい」と言われ、何で今言うのかと喧嘩になりながらも、改めて、最終締め切りが迫っている中、慌ててこの原稿を書いています。といっても書くことはすらすらとは出はせず、考えた末、私のこれまでの遠回りのご報告をさせて頂くことにしました。

私は2004年、大学受験に失敗して立教大学に入学しました。私の周りの友人たちも半数近くは受験失敗組だったように思います。平たく言えば、社会福祉をどうしても勉強したくて、という理由ではなく、立教大学というネームバリューになんとか惹かれて入学した、ということです。そのため、大学1年生の頃の私は、単位を取るために授業を受け、それ以上のモチベーションは特にはなく、のほほんとした大学生活を楽しんでいました。

そんな私に契機が訪れたのは大学2年生の時です。前年度に友人が韓国フィールドスタディを受講しており、彼女から話を聞きつけ、旅行もできて単位がもらえる、そんな授業があるなんて！とフィールドスタディの冊子を取り寄せたのがきっかけでした。友人が受講した韓国フィールドスタディの授業内容を読みこむよりも先に、そこに提示してある値段が思っていたよりも高額で、これなら自分で旅行に行った方がいいと、すぐに韓国は諦め（韓国フィールドスタディの内容は従軍慰安婦問題を巡ったものだったと思います。授業内容云々よりも、本当に観光旅行気分だったのです。申し訳ありません）、他にはどんな国があるのだろうと、ぱらっとページをめくって出てきたのがバングラデシュでした。自分1人ではこの先も絶対に行かないであろう国に、授業として行くことができる、面白そうと思い、応募を決めました。その後、結果を先に言えば、私はバングラデシュに強烈に惹きつけられてしまいました。大学3年生よりフィールドスタディを開講していた岡田徹先生のゼミに所属し、就職活動はせずに、そのまま大学院へと進学し、なにかに衝き動かされるようにしてバングラデシュでのフィールド調査を実施す

るまでになりました。1人では行かない国だからというのが動機だったはずが、結局、何度も何度も1人で滞在し、休学までして長期滞在となったこともありました。

私の修士論文のテーマは、バングラデシュ農村に生きる脳性麻痺児と彼らが生きる日常をめぐるものでした。児童婚、多産、自宅出産、医療的ケアの不足等々の農村の出産事情を背景に、当時、村には脳性麻痺児が本当にたくさん暮らしていました。そもそも村には「脳性麻痺児」や「リハビリテーション」という概念すらなく、母親たちは子どもを抱え、治療者を求めてさまざまな場所（それは村の呪い師であったり町医者であったり大学病院であったりしました）を渡り歩いていました。論文では、民族誌的手法を用いた調査を基に彼らの日常を記述し、支援側の論理について問題を提起しました。その一方で、現地でのフィールド調査を通じて、私は脳性麻痺の子どもの身体そのものに惹きつけられていきました。言葉を思うように喋れない子が圧倒の多数でしたが、彼らの身体は多くのことを直接的に訴えているように私には思えました。また同じ頃、彼らの身体に対してリハビリテーションを施す理学療法士の仕事にも出会いました。私も理学療法士になってバングラデシュの子どもたちを！と思ったわけでは決してありません。けれど、自分の身体ひとつで、他者の身体に向き合うその仕事が純粹に眩しく、いつしか修士課程修了後の進路選択として、理学療法士になることを考えるようになりました。

進路選択の時期、博士課程に進学して研究を続けるか、理学療法士を目指すか、心底迷いました。最終的には、言葉の力で勝負をする研究の世界に留まるのではなく、自分の身体をもってして他者の身体に向き合うことのできる理学療法士になることに選びました。ストレートに理学療法士になる人は、高校卒業と同時に専門学校に入るわけで、あまりの自分の遠回りに、本当に大丈夫か自分、と不安に思いながらの進路決定でした。大学受験をする時でさえ、こんなに学校選びに時間はかけなかったと思うほど慎重に専門学校を選び、こんなに真面目に学校に通ったことは未だかつてないと言言できるほど毎日学校に通い、人生初の就職活動と国家試験を経て、理学療法士になりました。

今、私は理学療法士4年目です。小児神経疾患分野に強い病院への就職もなんとか叶い、1日の担当患者のうちの半分は脳性麻痺の子どものを診ています。また小児の分野だけでなく、脳血管疾患や整形疾患、呼吸器疾患を有する成人の患者さんも担当しています。理学療法士としてはその子、その人の身体的な能力を最大限に引き出すことに努め、日々研鑽を積んでいます。けれど特に成人の場合は、身体的な能力を伸ばすことはもち

ろんですが、社会生活を送る為には、社会福祉的なサービスの利用が必要となるケースも非常に多いのです。日々の業務では医療ソーシャルワーカーさんとの連携も不可欠で、社会福祉の課題をさまざまな視点で学んだ学部生の頃の経験が、仕事をする上で貴重な財産となっています。

身体が動けば心も動くといった瞬間が、人には確かにあります。またそれとは逆に、心が動くことで身体が動く瞬間というものもあります。動かしたいと強く願っても自由に動かない身体が、とうとう自分の意に従って少しだけ動き出す、ということもあります。そのどの瞬間でも、その場に立ち会えると非常に嬉しく思います。

たとえば、以前に私が担当していた子で、トイレに座れるようになった自分がすごく嬉しいと全身であらわしてくれた子がいます。元々はオムツを用い、寝返りも自分では意のままにならない為、本当に全介助でオムツを交換してもらっている子でした。けれど負けず嫌いで、同じ年代の子がトイレで排泄していることも理解していて、しかし自分は座ろうとしても、気持ちが高まると却って全身が反り返ってしまうので上手く座れず、そんな状況に日々フラストレーションを募らせていた子でした。彼女は毎日のリハビリテーションの中で少しずつ座れるようになり、最後にはトイレに座れるまでになりました。ある日彼女は、しっし（おしっこ）でる！と大声で宣言し、40分間トイレに座り続けました。その時の彼女の得意そうな顔、嬉しそうな顔といったら、喜色満面とはこのことだと、こちらもつられて笑ってしまいました。せんせい、しっしでる！と言い続け、座り続け、結局その日は、トイレでの排泄には至りませんでした。彼女が自分のしたいことを表明し、少しでもそのように身体が動いた場に立ち会えると、ああ、よかったなと心から思え、至らない自分の仕事も少しだけ誇らしく思えました。

遠回りばかりしてここまで来ました。人には全くオススメできません。けっこうしんどいです。なんせ、社会人となるのに時間がかかり過ぎです。正直に言えばお金もかかりました。いつまで経っても何者にもなれず、ただの学生である自分に嫌気が指したことも一度や二度ではありません。博士課程に進まなかったことで、あんなに惹かれ続けたバングラデシュに関われなくなり、そのことを後悔したこともあります。今も、バングラデシュの光景を思うと懐かしさでいっぱいとなり、自由に訪れることのできない今の環境を恨めしく思うこともあります。けれど、あの時出会った子どもたちに想いを馳せながら、今は、目の前の子どもの身体に向き合うことを大切にしたいと思っています。

以上、慌ただしく書き上げましたが、これで私の報告を終わりにしたいと思います。夫も、こちらの文章の方がわかりやすいとのことで、よかったです。

今回は、学部の先輩である福島啓太さんをお願いしています。すてきな感性をお持ちの方ですので、私自身、とても楽しみです。宜しくお願い致します。